

1 概要

本報告書では、2023年3月13日~3月24日に行われた海外教育体験（台北市立大学）研修について報告する。本研修は、19年3月の研修以降、コロナ禍のため休止となっていたが、本年度3年ぶりに再開となった。台北市立大学英語科も久々の再開を歓迎して下さり、プログラムの設定、実習先小学校の選定と調整、チューターやコーディネーターの設定など、きめ細かな対応をしていただいた。学科主任の Chi-min Chang 張期敏先生（学科主任）が準備調整をしてくださり、また国際交流担当の Hung-Shu Cheng 陳宏淑先生も小学校との調整など実務でお世話になった。

渡航前の2月、3月はまだコロナの余波が残り、台湾の入国にあたっての検疫や日常の制限が予想される状況であったが、幸い徐々に制限は緩和され、渡航後の定期的な検査などの制限はなくなった。

この度は、台北市立西門（シーメン）国民学校（以下、西門小学校）が実習先となった。台北市の28のバイリンガル指定校の一つであり、また学校全体での学生受け入れの態勢が整っており、学生にとって有意義な教育体験をすることができた。



台北市立西門小学校の先生方および実習生とともに

なお、従来どおり、3月のこの時期は台北市立大学英語科学生の4年生の教育実習も並行して行われており、台北市立大学の教育実習に「相乗り」して本学の研修学生を受け入れていただいていたということも付記しておきたい。台北市立大学側の、小学校に対しての負担軽減という配慮があると思われるが、本学学生にとっては同時期に台北市立大学の学生が実習で同じ小学校にいて、サポートしてもらいやすいというメリットもあった。

なお、参加学生は、札幌校3年生4名であった

0183 小野寺 かなえ（言語社会教育専攻：英語）

- 0126 奈良 百花（言語社会教育専攻：国語）
0508 岩渕 雪乃（養護教育専攻） 配属：4年生
0110 中村 雪乃（言語社会教育専攻：英語）

2. 研修について

プログラムは、後期集中講義「海外教育体験（台北英語）」として実施され、渡航前に4回の授業を行い、主に台湾の文化、英語教育等の基本講義、学生たちの小学校での授業の準備をオンラインおよび対面で行った。

学生は、渡航前までに小学校での授業準備を入念に行い、研修中の小学校での授業実施に役立った。しかし、先方での配属学級、授業のトピック、回数などが事前に分からず、小学校実習が始まってから内容が分かり、修正を余儀なくされた部分も多かった。次回はできるだけ早くから内容が分かり、学生に伝えられるように、先方大学と連絡をとる必要がある。

以下、台北市立大学での研修を、大学での授業聴講と小学校での実習に分けて報告する。

3 台北市立大学での授業聴講

研修の第1週目は大学での授業聴講であり、内容は英語を多用して実践的な能力をつける授業が多く、学生たちは多くを学ぶことができた。



台北市立大学での授業聴講

学生たちは、以下のような授業を聴講した。

- English for Tourism II…sophomore/ Wen-Ying Lin
- Introduction to Western Literature…freshman/ LiChung Yang
- Basic Listening and Speaking Practice…freshman/I-Chien Chen
- Intermediate Listening and Speaking Practice…sophomore/Cheyenne Maechtle
- Intermediate Writing Practice…sophomore/Cheyenne Maechtle

- ・ Language and Culture…freshman/ Me-Ching Ho
- ・ Computer-assisted English…sophomore/ Yi-Ju Wu
- ・ Intermediate Listening and Speaking Practice…sophomore/Cheyenne Maechtle
- ・ English Pronunciation Instruction…freshman/Corrie MacMillan
- ・ English Performing Arts/Cheyenne Maechtle

なお上記最後の授業 English Performing Arts は、台北市立大学英語科の特徴的な科目である。台北市立大学英語科では、卒業論文がなく学科全員で行う「英語劇」がその代替となっており、その練習をする内容の科目であったという。この授業では、実際に英語教育現場で使えるようなチャンツや遊びを習得し、グループで発表するという活動を行っていた。

今回の大学での授業科目は、主に英語力増強のための授業科目であり、参加学生も実践的な英語力向上に役立ったと報告している。台湾の学生の英語力の高さにも驚き、参加学生たちは刺激を受けたと思われる。

なお、大学での授業聴講においては、単に技能・知識の習得にとどまらず、現地学生との交流も多く生まれることとなり、学生たちにとって、知識のみならず現地への適応でも利益が大きかった。台北市立大学の英語科の学生たちは、授業が終わってから夜市やレストランに連れて行ってくれたり、朝ごはんを一緒に食べるなど、参加学生に大変親切にしてくれた。

4. 小学校での教育体験について

台北での第2週目は、西門小学校での教育体験であった。参加学生は西門小学校の第3学年及び第4学年（各学年4学級）の学級に1名ないし2名ずつ配属された。全ての配属学級には台北市立大学英語科からの教育実習生が配属されており、参加学生と担任教員及び児童とのコミュニケーションを仲介する役割を担った。このことは、参加学生にとって、海外の小学校で教育実習を行うという心理的なハードルを下げる上で有効であったと考えられる。

参加学生による教育体験として、第4学年の全児童に向けて日本文化に関するプレゼンテーションを英語で行う機会があった（1コマ、40分間）。学生は、自身の自己紹介の後、日本食や和菓子について紹介した。クイズアプリ Kahoot を用いて児童とインタラクティブに実施したことで、児童も最後まで飽きずに参加することができていたが、クイズの答えをグループで選んで解答させるようにしたことで、話し合いが盛り上がりすぎてしまい、担任教師や教務主任の先生による指導が入る場面もあった。参加学生は、母語を異にする児童に対して英語を用いて授業をすることができた達成感を得ると同時に、第二言語を用いて指導する難しさを実感したようであった。



一部の参加学生は、上記のほか配属学級でも日本文化紹介をする時間があった。配属学級での授業内容はさまざまであったが、折り紙や福笑いなど、日本の昔遊びが中心であった。特に折り紙は西門小学校の児童に人気が高く、休み時間のたびに指導とともに折り紙をしている学生の姿があった。福笑いはグループ活動とし、目隠しをした代表児童に対して他の児童が英語 (up, down, right, left) で指示を出す活動としたことで、実際に英語の授業で行うような活動を実施することができた。

先述のように西門小学校は台北市のバイリンガル教育特例校に指定されており、いわゆる校内研修の機会が実習期間中に設定されていた。校内研修では西門小学校のバイリンガルプログラムについて教務主任教諭から説明と台北師範大学の教授からの助言の後、参加者によるディスカッションが行われた。研修には西門小学校の教員、台北市立大学からの教育実習生に加えて、実習生以外の台北市立大学の学生も参加していた。多様な参加者と交流できたことは参加学生にとっても有意義であったと考えられる。



5. 成果と今後の課題

まず、成果として大きいのは、海外の異文化において学生が大学および小学校において意義深い体験と学びがもたらされたことである。本学学生が不慣れな環境にもかかわらず、積

極的に現地の学生や児童と触れ合い、日本文化について英語で伝えることができたことは、今後の彼らの将来において大きな糧となるものと思われる。参加学生は口々に 2 週間の体験がいかに素晴らしかったかを語っており、将来教育現場に身を置くことになった暁には、必ずやこの度の異文化体験が役立ってゆくものと思われる。

第 2 に、台湾の英語教育についての学びである。ある学生は「私の配属学級は 3 年生だったのですが、多くの子とも英語で意思疎通を図ることができ、英語力の高さに驚きました。」と述べている。台湾の小学校英語教育について現地の先進校の指導の実際を見て、学生は多くの学びを得ることができたと思われる。

第 3 に、学生がこの研修を通じて、英語を使うことへの慣れを得たことである。学生たちは、前半は大学において、後半は小学校において全てを英語でコミュニケーションをする必要があった。日常的な英語使用によって、慣れが生まれ、より円滑に英語を使う機会が得られたことは、参加学生の自信につながったものと思われる。

課題としては、学生募集において札幌校以外の学生の応募を促す PR が必要であったかもしれない。さらに今後は短期的訪問だけでなく、事前事後の人間関係づくり、さらには大学における授業科目との有機的なつながりなどの検討があってもよいと思われる。

6. おわりに

全体として、今回の研修は大きな問題点がなく、台北市立大学の周到な計画と手厚い支援体制により、参加学生たちの満足度も高かったと判断している。

台北市立大学は、空港の出迎え、入寮時に院生によるお世話、大学での学生チューター、実習先小学校でのチューターなど大変手厚く本学学生の世話をしてくださった。それゆえ学生は常に不安なく、温かく受け入れられた。台北市立大学の受け入れ態勢に深く感謝したい。

3 年間休止していた本研修を再開できたことは何よりの喜びであった。当初コロナの制限や感染への不安もあったが、実施できたことは大きな進歩となった。オンラインでのやりとりも可能ではあるが、やはり実際に学生や教員が行き来をし、相互の利益を尊重しながら交流を続けてゆくことが、実のある交流となると思われる。姉妹校とは、永く良好な関係を築くことによって、双方の大学の教育力を高めてゆくことができると考える。

